

背を向けての私共の内地南九州勤務は、靖国神社に神鎮ります幾多の英霊に対し慙愧に耐えない次第でした。

さて、昭和二十年十二月末、復員帰宅しました。青年団、消防団に入り地域の復興に従い、二十八歳で結婚、子は女ばかり四人、孫は七人、妻は平成八年十一月死去しました。私は目下独居老人です。

結婚後の経歴は町議会議員、農地委員、老人会会長、軽スポーツ会会長を経て、ただ今は恩欠連岐阜県連会会長を拝命中である。申しおくれましたが、復員後は県の林務課に入り定年まで勤務しました。

最後に、戦死も戦傷病も関係なく五体無事で復員し、祖国の再建復興にも、我ながら応分の寄与と貢献ができました。人並みに家庭も持って、平凡ながら夫から父、祖父と脱皮し成長して、現在七十八歳の老境に身を置き、先輩、同僚、後輩と共に、手をたずさえて日本の弥栄を祈念すること切なるものがあります。

恩欠者救済の画龍点睛を望むことに、老躯を捧げて

悔いなしです。

## 我が青春の空白

岐阜県 清水 秀蔵

六十年も昔のことで、忘れたことが大部分です。一生懸命に思い出してお話します。

まず家族は、両親のもとに姉と弟の三人兄弟の五人家族でした。子供心の記憶では、世間並の生活状態でした。自分が六歳か七歳の時に両親が離婚しました。それから父親は三年程した頃に死亡しました。自分は母方の祖父母に引き取られて成長しました。実家の祖父母が死亡して家が無住人になりますから、母方の祖父母と一緒に実家で生活しました。少々複雑な状況でしたが、無事に学業も修めて高等科二年を卒業しました。

近隣にかわらの窯元があり、住み込みで奉公に行きました。屋根がわらが主力産業でした。当地方は冬季

が非常に厳しく、製造工程においても太平洋側のかわらと多分に差異がありました。かわら製造業者は屋根葺きも行います。新築の時は良いのですが、古屋敷の修復の時は真っ黒に汚れて大変な仕事でした。

当時、半強制的に青年学校に行くように行政の方から指示があり、雇用主は従業員の未青年者を、一週間に二度、夜間二時間程度通学させていました。自分はお陰で軍隊で多分に要領良く成績を上げました。青年学校は五年間でした。

当時は徴兵検査(壮丁)が日本国民で男子として生まれた者の重大なる義務でした(学生は徴兵延期で卒業まで)。一般商工業従事者は壮丁を一応の目安として働き、以後は一人前の商人とか職人として、本人はもちろん、世間も認めていました。丁稚小僧から番頭に、工業関係では職人として取り扱われました。

自分は大事な徴兵検査の前に二カ月ほど病名不明の大病を患い、体重も四十キロ位になりふらふらの状態で徴兵検査会場へ出頭しました。諸検査終了して全員

整列し、一人ずつ徴兵執行官の前に呼び出されて発令を受けるのです。順次進んで自分の時が来た、前に進み出て執行官の顔をジッと見上げて命を待つ。数秒が数十分にも感じました(体が病み上り故)。

「清水秀蔵、甲種合格。なお本日は病み上りのようであるが、入営までに十分注意して健康になるように命ず」でした。復唱して退下し、会場を後にしました。この日は自分の上枝村のほか近郷の村々からも全部高山に集合しての合同検査でしたから、大量の青年が町中に溢れていました。来年は軍隊に行くのだと自分自身をいましめ、健康はもちろん、すべてのことについて最善を尽くしました。その甲斐あって体重も増加し、すべて順調に進みました。

正月も終わり、「二月二十二日入営」と役場から通知があり、親戚・近隣・友人からお祝いを頂戴し、玄関先には大きな幟が、春とは名のみの飛驒路の冷たい山風にハタハタとはたいていました。二月二十一日に高山駅まで行きました。近隣の人々、婦人会の方々は「国防婦人会」の幟を掛け、小学生は日の丸を持ち

「勝ってくるぞと勇ましく」と声高らかな歌声に送られて、高山駅を出発しました。

この時は自分一人が、大阪陸軍第八連隊入営でした。一夜を開業医院をしている叔母の家で厄介になり、翌朝、心尽くしの鯛の尾頭付きと赤飯で「晴れの門出だ、頑張れ」と励まされました。そして家の者全員、看護婦さんまで加わった見送りで、誠に有り難かったものです。

第八連隊の営門を入ると、一瞬背筋に電気が走ったような気持ちでした。名簿と令状と本人の顔を見て「右」「左」「中央」と集合場所を指示していました。自分もそのように区別されて、一つの集団に入りました。四十九人が同年兵です。と、古参軍曹が来て「注目！俺が〇〇軍曹である。貴様達を引率して行く、途中逃走・落伍した場合は、軍法会議にかける。命令や指示通りに行動する事。私服にて市内行進であるから、二列縦隊で、市民に迷惑をかけぬ事、以上、出発」で営門を出ました。

旅館の名前は忘れましたが、兵営からは遠くはなれていました。ここに二泊しました。乗船待ちでした。

そして冬用の肌着から軍服、防寒外套に毛皮の付いた防寒帽子が手渡されました。これで完全に満州の部隊だと自覚しました。赤十字腕章の兵隊と軍医が来て全員に四種混合のワクチン注射を行いました。そして「一時間は安静にして横になっておれ」でした。

自分は第八連隊だから関西が主力と思っていましたが、皆と話し合ってみると全国的に來ていたようでした。東北地方から九州まで、それぞれの地方なまりで「大変だなあ」と思いました。自分の言葉は皆理解してくれましたが、東北と九州の言葉は皆目理解に苦しかったです。

数日後、大阪港まで行進し、三井汽船の三千トン級の御用船に乗船しました。軍人輸送用に内部が改装されて、上甲板には竹製の筏が二重、三重に積み重ねてあり、船内は大きく上下二段に区切られ、下段の船倉は重火器（大砲・自動車・軍馬・軍需品）等々で、上

段は前部、中部一、二、後部に区切られ、それぞれ蚕棚のごとく、座れば天井に頭が当たるような作りでした。便所は左右の舷側に木箱を設置してあり、その中に入って用を足す。実に軍隊の簡略簡素な設営方法でした。

季節的には海は荒れる頃だと思っていたのに、波は穏やかで、船足は肅々と進み、今の朝鮮の羅津に入港し即上陸、港湾施設で半泊し、今度は列車に乗り込みました。日本の汽車と比較して席の幅も少し広く、車体も大きいと感じました。

戦友の中に満州、中国の事情通がいて種々説明してくれました。「铁路は広軌といつて横幅が日本固有鉄道より広いから、すべてが大陸的だぞ」でした。乗降口のドアの取っ手に布が巻いてありました。これは冬期間、人間の皮膚が引っ付くので、その予防のためでした。豆満江を渡河し凶門を通過しました。いよいよ満州だ、誰言うもなく緊張の一瞬でした。

列車はばく進し、翌日牡丹江に到着しました。当時

ソビエト連邦のウラジオストックは東洋に対しての最大の門戸で、軍事施設（特に海軍）として重要でした。満州・日本にとり、ウラジオストックに対しての防衛主力の最前線基地がここ牡丹江でした。

昭和十五年二月二十九日（潤年）駅頭に整列し、各中隊ごとに引率官（軍曹）に先導され行進しました。独立歩兵守備隊に到着しました。正式名称は満州第九一六部隊第二中隊で、またの呼称を第四独立歩兵守備隊と言いました。同年兵も全国からですが、古年兵も全国からの集合部隊でした。当初、三月、四月と二カ月間は完全な独立歩部隊としての歩兵訓練を受けました。

内務班は厳格で、絶えず怒鳴り声がありました。第一に「歩兵操典」で、第二に「作戰要務令」を徹底的に修学させられました。その他の教科、軍律を厳重に行わしめるためには「刑法懲罰令」も頭に叩き込みました。自分は青年学校で一応修学していた関係で、軍人勅諭をはじめ教官から細部にわたって指導されていきましたから大変楽に、その日その日が送れました。

五月一日、早朝「非常呼集」が掛かり、完全武装で全員整列です。鉄道沿線に匪賊の襲撃とのことでした。自分達初年兵は半人前だから、古兵の邪魔者にならぬようにと班長に言われて、後から静かに行くだけでした。五月でも氷のような冷たい雨が降り、車の行進が立ち止まりました。見ると重機関銃が小川の一本橋で立ち往生していました。自分は直接関係なかったが、「班長殿、清水二等兵が重機関銃を担いで渡河します」と申しました。班長が「よしやれ！」と命令して下さいました。川面まではかなり高く足がすくみ、体が震えるくらいでしたが、自分は屋根葺の仕事をしていたので、高い所は慣れていたので大丈夫でした。

重機は通常前後二人か三人で運び、駆け足の時は四人です。それを一人で肩に担ぐと十分重量があり、大変でした。氷雨で全員が齒の根が合わぬほどガタガタと震えていました。自分は銃身を対岸に置いて引き返し、また弾庫（箱）を担いで渡りました。普通は重機

は中隊に一機あり、下士官一人と射手が第一と第二と二人、弾薬手二人。狙撃手二人、保安要員四人、小銃四人、それに軍馬四頭、兵は計十五人くらいでした。弾庫は一箱六百発で、小銃弾の箱より幅広く、長さは短く、重量はほぼ同重量でした。なお軽機関銃は各班に一丁ずつありました。この時の討伐で張り切って頑張ったことが中隊長の目に止まりました。六月末まで丸二カ月間は討伐でした。

七月一日付で特業が発せられました。現役初年兵全員が特業に従事することになり、自分は自動車操縦手としての訓練を受けることとなりました。牡丹江の北方五十キロ地点にある樺林の部隊において「自動車教練を受くべし」でした。三カ月間で完全な自動車兵になるべく勉強をしました。「機関名称」「操縦技術訓練」「操縦教範」と学ぶことが多く、他部隊からも来ていますから自然闘争心がわいて、一生懸命になりました（教習兵は二十八人）。

三カ月教育が終了して、現隊復帰の命令にて帰営しました。ところが本隊は移動で「老黒山」に駐屯して

いるとのことでした。自分は残留守備隊の一員として残ることになりましたが、体の調子が悪くなり、軍医さんが「練兵休」だと言って下さいました。自分ではどこが悪いのか不明ですが、発熱と食欲不振、そのうえに眠れない。このような日の連続でした。結局、牡丹江の陸軍病院に入院を命ぜられました。外傷もなく原因が何であるか不明です。毎日が無気力な状態でした。ちょうど徴兵検査前に体調を崩した、あの時と同じような気がしました。

毎日寝るのが怖ろしく、また朝起きても終日虚無感に悩まされて病床の戦友や衛生兵と語ることも少なく、いつの間にか半年過ぎました。退院許可が出て、原隊へ帰り日常業務に復しました。

昭和十六年、秋期演習があり、あまり無理をせず病院下番らしく活動しました。その後には部隊で武技競技会があり、中隊部門の手榴弾投擲で第一位、部隊で射撃部門でこれも第一位、銃剣術も第一位と各部門において優勝でした。班長以下全員に祝福されました。不

思議なことです。半年も病気で入院していたのに、こんな立派な成績を取ったのです。

軍の関連業務で森林内に分け入ったところで、軍属が現地人を使って炭焼きを行っていました。この夜警に上等兵を長として五人、二カ月ほど行きました。同年の十二月末に帰って来た時に、人事係より「清水、貴様に特命で将校官舎当番を命ぜよと、中隊長命令だ」でした。官舎は中隊長の他に二人の新品少尉さんです。当番は自分の他にもう一人いて、二人で三人の将校当番です。当番任務は当主将校が「日常軍務に支障を来さぬように万全を期すべし」と「よって衣食住のすべての面を十分留意して服務すべし」でした。

当番として一番気を使うのは食事です。栄養価を考え安くて旨いものを仕入れて調理することでした。相棒が料理人上がりでしたから、自分は仕入れ（食材）を担当し、営外酒保に買い出しに行き、時には原隊へ帰って炊事場で肉・魚・野菜等を（内密）もらって帰りました。自分がなぜ官舎当番になったのかと思いましたが、後で判明しましたが、初年兵の時に、重機関

銃を担ぎ、引き返してまた弾庫を運んだのを、中隊長に目撃されていたとのことだ。

ちなみにこの頃の物価と俸給を申します。酒保にて、アンパン三個 五銭、うどん一杯 四銭、おでん一皿 十銭、ビール 十八銭、煙草（ほまれ）二十本七銭でした。

俸給は、一等兵 五円五十銭、上等兵 六円三十銭、伍長 九円、軍曹は一等級から四等級で十三円から二十一円、曹長 二十八円から三十円、准尉 七十円から九十五円でした。少尉は七十円、中尉は九十円から百五十円と記憶しています。ですから一銭でも安価な物を仕入れるのが自分の最大の使命でした。六カ月間の官舎当番は気は使いましたが肉体的には休養を頂戴したようでした。

昭和十八年三月、満期除隊で大阪の第八連隊へ帰りました。入営時に世話になった叔母の家に立ち寄り、二、三日遊んで高山へ帰りました。その日は、私の生

まれた上枝村が高山市に合併した記念日となりました。二、三日経過してから以前勤めていたかわら屋へまた勤めました。今度は小僧ではなく職人として月給をもらいました。

翌年昭和十九年夏、結婚し一男二女をもうけました。昭和二十年六月十日に召集令状を受け取り名古屋に集合でした。松代に大本営が設置されるからといって、鶴嘴つるはしやスコップ等を持って山の中に穴を掘れといわれて朝から晩まで土方をやらされました。

七月の末頃に知多半島方面に出動して、塹壕と哨壺と防空壕を掘って掘って掘りまくりました。鶴嘴もスコップも先が丸くなりました。二カ月間の穴掘りも天皇陛下の玉音放送で終了となりました。

自分の軍隊生活の労苦の第一番は、重機関銃を背負って川を渡り、また弾庫を担いだ時が最高の労苦でした。半年も入院で静養し、官舎当番で半年案をして有り難い軍隊でした。終戦前の穴掘りは民間人も同一でした。終戦後の荒波も、妻や子供等と一心に働き抜

きました。今八十一歳の老年を毎日無事に送っている  
ことに感謝しています。皆さん有難う。